

# 尻別・豊平・千歳川源頭踏査

本田 剛史 (2001入部)

## 【概要】

尻別川(尻別川水系)と千歳川(石狩川水系)は、同じ源頭をその始発点としており、またこの付近は豊平川(石狩川水系)の源流地帯でもある。当時、分水嶺や源頭に絡めた活動を計画していたと思っていた私は、我々が普段ラフティングなどで親しんでいるこの三河川の源流が一箇所で交わっていることを知り、ただそれだけの理由で無性にここに行きたくなった。

ただこの源頭は標高が八六四mとかなり低いので、源頭付近では重度の藪漕ぎが予想された。そのため私はこの計画を出しあぐねていたが、何とか2人の賛同者(マゾヒスト)を得ることができ、この誰も踏み入れたことがないであろうピークに沢登りで行って来た。

## 【日時】

二〇〇五年八月七日～九日

## 【メンバー】

本田 剛史(ほんだ たけし リーダー)  
渡慶次 元(とけいじ はじめ 装備・写真)  
板垣 英すけ(注1)(いたがき えいすけ 食糧)

## 【行動記録】

八月七日 晴

豊平川林道入口出発 12:00—標高五二二m林道橋 13:30—六五五m支沢より入溪 15:00—豊平川に合流 15:30—中山沢出合にて幕営 16:00

八月八日

中山沢出合出発 7:30—六九八m魚止め滝 13:00—七五〇m付近河原にて幕営

八月九日

幕営地出発 7:00—七七五m付近にて左岸斜面に取り付く 7:30—八六四m源頭 8:00—七四五m尻別川二股 11:00—九五〇m付近で林道に上がる 13:30—林道ゲート 14:30

## 【報文】

八月七日

意気揚揚と計画に臨んだ我々であったが、前日のOB来訪により、朝四時まで飲むことに。いきなり計画に暗雲が立ち込める。それでも今回車を二台調達することができたという幸運もあった。当初は車が一台しか手配できず、沢から出た後は長い長い林道歩き(十キロくらい)ノブスヒッチハイクの予定だったが、これで行動時間が短縮され、差し引きゼロになった、と思いたい。しばしの休息と長い長い車回しを経て、十二時ようやく沢に

向けて出発する。

入渓地点までこれまた長い林道歩きだが、これは計画上仕方のないことだし、このくらいの苦難ではマゾヒストたちはまだまだ涼しい顔である。ときおり林道から豊平川の様子を垣間見るものの、まだまだ沢というよりは川で、とても流れに沿って歩けるような感じではない。渡慶次は川下りができそうと喜んでしたが、この目論見は後に惨憺たる結果に終わる(注2)。十三時半に入渓を予定していた橋に着くが、まだまだ水流は多い。時間も押しているのに、さらに林道を歩いて距離を稼ぐことにする。この決定にもマゾヒストたちは全く動じない。しかし八月の暑さは不快感を募らすばかりなので、休息も兼ねてしばし水と戯れる。

その後順調に距離を稼いでいるうちに三時近くになる。林道は六七五m付近まで豊平川に沿って続いているので、林道終点まで歩いて距離を稼ぎたいところだ。しかし、それでは沢登りの醍醐味が減るし、板垣も「五十センチのアメマス釣る」と豪語している。なにより林道沿いで幕営するのは嫌だ。というわけでこの辺りで支沢を伝って豊平川に入ることにする。そういうわけで支沢を下りていくわけだがここも流量が多くて少し苦戦。三十分近くかかってようやく本流に出る。

豊平川本流は相変わらず水量が多く、端のわずかな部分以外に歩くところがない。その水際の辺りをゆっくりと歩いていくと、突然川幅一杯に緩やかに落ちる見事な滑滝に出くわす。林道から本流に入ってよかった。記念撮影。その後日も傾いてきたし、釣りをする時間も欲しいということで、中山沢出合を本日の幕営地に決定する。

釣りをしながら中山沢出合に近づいていくと…なんと先客がいらっしやる。正確には人の姿は見えなかったが、ザックやテントなどが置いてあり、幕営の準備がなされている。この川に入ったら最後人の気配を感じることはないと思っていたのに…。幸い我々のテントを張るスペースもあったので、板垣は早速ザックを置いて釣りに行き、残る二人も幕営の準備をした後釣りに出かける。が、釣れない。渡慶次が極小のイワナを一尾釣り上げただけである。打ちひしがれてテントに戻ると、もう一方のテントの主が戻ってきていた。彼らは釣りを趣味とする親子で、札幌で会計士をしている息子さんと、今は埼玉に居るが北海道の溪流の味が忘れられなくて度々こちらへ来るというお父さん。四十センチくらいのサクラマス・アメマスをゴロゴロさせている。「あー、この辺にいたヤツはみんな釣っちゃったよ。残念だったね。」とお父さん。無念、板垣。しかしその魚達を振舞ってくれるというので、「この先、藪漕ぎに手間取って不慮に泊数が増えるかもしれない。食糧の温存は必要だ。」と勝手に納得し、好意に甘えることにする。一応我々も、もはやどうでもいい自分達の夕食を作る。五人で焚き火を囲んでの夕食はとても楽しい。息子さんが学生の頃、沢のことなどわけもわからず忠別川(注3)を遡ったことなど、面白い話も聞いた。明日の我々の出発は早いので、今日の釣りを最後に川を下るといふ彼等に夜のうちに敬礼と別れの挨拶をし、就寝する。

八月八日 快晴

六時に起床。しかし昨夜別れを告げたはずの親子が先に起きているという大きな不覚。朝食は昨夜とは逆に、フリーズドライ食品が主体の彼等に我々がご飯を振舞う形になる。我々の出発間際、お父さんが「もう飲まないからあげるよ。」とペットボトルに入った琥珀色の液体をくれた。前日飲み過ぎたせいもあって、今回の活動に酒らしい酒を持ってこなかった我々。この好意もありがたく頂く。今度こそ本当の別れを告げ、我々は上流へと向かって歩き出した。

この辺りで豊平川は東南東へと流路を変える。相変わらず水量は多い。左岸側は台地状になっているが、ここを歩く(すなわち藪を漕ぐ)気にもなれず、木々で薄暗い水際にひたすら進路を探す。当然あまりペースが上がらず、九時半ごろ林道の最後の橋の下をくぐる。周囲の藪の状況を見るが、かなり草の背が高く、そして濃密である。この先、源頭直下でもかなりの藪漕ぎを強いられそうである。六八〇m二股を過ぎ十時になったとき、あるひとつの決断を下した。

「このまま源頭を目指すも源頭付近の藪の中で幕営になる可能性が高い。藪の中で途方にくれて寝るよりも、藪漕ぎは明日の朝からにして今日は豊平側の河原に宿を取り、英気を養おうではないか。」

この予定だと尻別側でもう一泊しなければならなくなる可能性があるが、食糧係の板垣に聞くと、食糧にはまだまだ余裕があるという。はたしてこの修正案は可決された。メンバーの顔にも安堵の色が浮かぶ。

計画が修正され歩き出したとたん、我々の前に見事な柱状節理が現れる。流量も少なくなつて、ところどころに滑床(注4)も現れはじめた。そして私の心にも余裕が現れ始め、沢を存分に楽しもうという気分になってきた。この辺りで本日の夕食を調達するために釣り竿を手に装備する。流石にアメマスなどは釣れないが二十センチ台のイワナが釣れる釣れる。釣りのことなど全くわからず、へたくソの私でも釣れる。渡慶次は撮影にまわってくれた。釣りを楽しみながら登っていくと、これまた川幅一杯に流れ落ちる魚止めの滝(五m)に出会う。この滝壺でもしばし釣りを満喫。さすがにこれ以上釣ったら食い足りないだろうという辺りまで釣り、再び登り始める。魚止めの滝は見たところ取り付くところがないので、滝にスロープ状に挟まっている倒木を伝って登る。

魚止めを過ぎると川は一面黒く苔むした滑となり、非常に快適である。滑がスロープ状になっているところでウォータースライダーも試みたが、いかんせん水量と傾斜が少なく滑らなかった。そんなこんなで楽しみながら登って行くと、小漁岳への沢を分ける二股でピンクテープ(注5)を発見。さらにその少し上ではジギスカンの袋が…。人の気配はないだろうという思いがまたもや裏切られ、軽くショックを受ける。この散らかしように見るに調査業務の隊が入ったのだろうか。時間も迫ってきたので、我々も七五六m二股少し下で幕営することにする。

何とかテントを張れる河原を見つけ、荷物を下ろす。ここからは宴の始まりである。今

回の活動にあたって、食糧系の板垣は高らかに食糧のテーマを宣言した。

「高カロリー・コンパクト・イモ！」

…いや、その三つはどう考えても並立しないから…。論理的に考えれば「高カロリー＋コンパクト＝イモ」ということであろうか。というわけで、今回の食計は米も持ってきてはいたが、それがつきたらイモということである。しかし今日のところは現地調達により大量のおいしい食材を得ることができたので、お芋さんの出番はなさそうである。申し訳に麻婆春雨(これも高カロリーコンパクト食品である)も作ってみるが、食べるのはひたすらイワナ、イワナ。ウイスキーも開け、まさしく宴である。焚き火の消える頃、未知なるピークへの期待と藪漕ぎの不安を抱いて就寝。

八月九日 快晴

本日も六時起床。手早く朝食を取り、藪漕ぎに向けて気を奮い立たせて七時出発。七五六m二股を過ぎ、左岸斜面の藪の中にかすかに水流のある小さなルンゼ(注5)を発見。ここで腹を決める。コンパスをピークに合わせ、リーダーの私を先頭にいざ藪の海へ出発！

登り始めたものの予想以上に藪は手ごわい。さらに傾斜も地図を見て想像した感じよりもきつい。巨大な蛇がまとわりついてきて邪魔だ。絡まりあう笹(注6)に弾き返されながら高度を稼いでいく。ピークまでの高度差は約一〇〇m。この標高ではハイマツ(注7)など現れるはずもなく、この笹と格闘を続けることになるだろう。無心で登るのみである。しかし、三十分も登ると斜度が緩くなってきて、全体的に平らになってくる。意外に速い。平坦な藪の海をコンパスのみを頼りに歩いていく。ときおり、疎らに存在する木に登って辺りを見渡す。が、豊平川対岸の山々が見える以外は見渡す限り平坦な笹の海である。当然、ピークを示す標識の類などない。誰も来るはずがないのだから。藪の海に麻痺しないうちに、一応源頭に着いたということで記念撮影。ピークにきた時の感慨は、今回は微塵も無い。早速七四五m尻別川合流点に向けてコンパスを切りなおし先へ向かう。

この尻別川に向かって下りる過程の中で、怖いことがある。間違っ隣りの千歳川の谷に下りてしまうことだ。地図で見ると千歳川の谷はこちら側が切れ落ちるようになっており、函のようになっている。さらに人里までの距離が長く、また利用できそうな林道も近くにない。よって針路を東(左)に取りすぎて千歳川の谷に吸い込まれてしまうことだけは避けたい。また藪による時間と体力の消耗も心配だ。地図で見ると、尻別川の斜面には微妙ながら沢形がついているので、願わくばそこに誘われるようにはまっていくなが理想である。すべてはこの三mの笹の海の中で自分を見失わないことにかかっている。

千歳の谷に怯えながら、右に行け、右に行けと声をかけながら進む。だんだん傾斜が出てくるが、それはお世辞にも谷とはいえない地形を作るばかりである。だんだん口数が少なくなる。歩いているところが周りより少し窪んできた。これは谷ではないのか？そんなことに心の中で一喜一憂する。果てしない。そして暑い。

その窪地のようなところを歩いていくと、先頭を歩いていた板垣の姿がふと消えた。近

寄っていくと笹の中に突如現れた亀裂(深さ一mくらい)の中に落ち込んでいた。そしてコンパスと地図で調べると、この亀裂は尻別川の谷の方へ向かって伸びている。水流は無いがこの亀裂は尻別の支流ではないのか？僕等は勝ったのではないのか？…そう思いながらも信じきれない。ただ亀裂の中は格段に歩きやすく、ペースが上がる。進路も確実に尻別側へ向かっている。やがて、亀裂は明確な谷に変わり、そこからこんこんと水が湧き出している。間違いない、これが尻別川の源流、その一つであろう。ああ、これを見るのがこの計画の目的の一つだったっけな。やっと人心地を取り戻し、水を手のひらにすくってみる。ふと気が付くとまた蛇が私の周りを飛び回っている。これは豊平側の斜面を登っているときにまとわりついてきた蛇ではないか！少し感動するも冷静に水の中へ叩き落す。その後順調にこの水流を下っていき、十一時に七四五mにて無事尻別川本流に合流。正直、このときが一番達成感が大きかった。地図とコンパスに感謝。

尻別川本流も豊平川と同じく滑床が続く。ただこちらのは赤茶色をしている。歩きやすく、結構なペースで下れる。これなら今日中に帰れそうぞ。六五八m二股直下に豊平川で見たような川幅一杯の垂直な滝(五m)。ただあちらより川幅も流量も少ないので迫力は小さい。フリークライミングの要領で直接下降するも、全く問題が無い。その後も二つほど五mくらいの滝が現れるが、階段状になっており通行に支障は無い。メンバーにも心の余裕が表れ始め、写真を撮ったり泳いだりして遊ぶ。沢登りという滝の登はんには主眼が置かれがちだが、こういうのも面白いじゃないか。

そうして下っていくうちに川幅・流量共に大きくなり、右岸側に林道が現れる。正直、足が笑い始めていた私は、早く林道に上がりたいばかりに斜面から強引に林道にアプローチしようと試みるが、棘の生えた木に弾き返される(棘はしばらく体内に残った)。あきらめて川を下りて行くと、容易に林道に出れる場所がすぐに見つかり二人から笑われる。ここから林道歩きが始まるが、豊平側のものに比べれば大した事は無い。途中、釣り人が駐めたであろう車をたくさん見た。結構な人数が入渓しているようだが、我々のみた源流部の様子を知るものは一人も居ないであろう。自己満足に浸る。また、本流にはそこそこ立派な滝もあった。もう歩くのにも飽きたなと思った頃、ゲートと我々の駐めた車が現れ、ここで活動終了。自己満足、そしてマゾヒスト達の心を満たすには十分な活動であった。

[反省]連絡人(注8)への最終連絡時刻の設定を誤った。計画書では最終連絡時刻は八月十日正午に設定されていた。今回の計画では停滞・進行遅れの可能性がかなり高かったので、予備日を想定した上で時刻を設定すべきだった。幸い源頭付近で携帯電話が使える、連絡人にこのことを告げられたからよかったが、それができなかつたらどうなっていたことか。猛省。

注1 英すけの「すけ」は「祐」のしめす偏の部分で「示」で置き換えたもの。

注2 「続・豊平川探検記」参照

注3 忠別川 大雪山系・忠別岳付近を源流とする川(石狩川水系)。上流部は全区間函とも言える様子で、増水も早い。沢登り難コースの一つ。

注4 滑 一枚岩で、表面の滑らかな地形。これでできた河床・滝が滑床・滑滝。

注5 ルンゼ 谷よりもずっと小さな斜面の奥まった所。ごく小さな水流のあとに出来る。

注6 北海道の笹は大半がチシマザサ(ネマガリタケ)といわれるものである。

注7 ハイマツ 比較的標高の高い山の稜線付近に見られる背の低い松。マツタケが生えるという噂を聞くが、筆者は一度も見たことが無い。

注8 連絡人 活動に必要があれば設定され、活動隊からの連絡を受ける人。最終連絡時刻までに連絡が無い場合は非常事態とみなし、警察に連絡するなどの救助活動に着手する。